

巻頭言

本研究所の前身である金沢大学がん研究所は、昭和 47 年に設立されました。設立以来今日までに、がん転移に関わるタンパク分解酵素の発見、がんの転移・浸潤に密接に関与している種々の生理活性物質の機能解明、がん幹細胞の分子基盤の解明、分子標的薬の耐性機構の解明など、基礎研究のみならず臨床研究においても、本研究所は大きな成果を挙げてきています。

これらの成果を踏まえるとともに、がん研究の成果を診断・治療法の開発に結びつける努力を一層強く求めている社会的要請に応えるため、がん診療において今日なお未解決な点が多い「転移」「薬剤耐性」の克服を目指すことを、研究所全体の使命と位置づけています。この使命の遂行のために、「転移」「薬剤耐性」の成立過程に密接に関与している「がん幹細胞」「がん微小環境」の実態解明が必要であると考え、「がん幹細胞研究プログラム」「がん微小環境研究プログラム」「がん分子標的探索プログラム」「がん分子標的医療開発プログラム」の4つのプログラムからなる体制へと平成 22 年度改組いたしました。さらに、21 年度末の基礎部門の研究棟の新築移転を契機に、学内ならびに学外の多くの研究グループとの共同研究を従来以上に推進するために、共同研究資源ならびに共同利用設備として、ヒトがん組織バンク・マウス発がんモデル組織バンク・ヒトがん細胞株バンク・前臨床実験施設・臨床治験施設を拡充・整備いたしました。以上の取り組みを評価され、「がんの転移・薬剤耐性に関する先導的共同研究拠点」として全国共同利用・共同研究拠点として認定され、平成 23 年度より拠点としての活動を開始しています。さらに、この認定を契機に、研究所全体としての使命を一層明確にするために、研究所の名称を「がん進展制御研究所」へと 23 年度変更いたしました。

研究機関のネットワーク形成の一環として、全国 9 つの医系の国立大学附置研究所による「研究所ネットワークシンポジウム」を平成 17 年度から行っています。23 年度には新たに富山大学和漢医薬学総合研究所とのジョイントセミナーの定期的開催を開始し、さらに 24 年度には中国復旦大学上海がんセンターおよび北海道大学遺伝子病制御研究所とのジョイントシンポジウムの定期的開催を開始する予定です。

個々の研究者の研究レベルの向上を図ることは勿論のこと、国内外の優れた研究機関とのネットワーク形成を推進することで、「がん幹細胞」と「がん微小環境」を切り口にした「転移」「薬剤耐性」研究の国際的レベルの研究拠点となるべく、教職員一丸となって鋭意努力しているところです。このような取り組みの一端を、本年度の金沢大学がん進展制御研究所年報からご理解いただければ幸いです。

金沢大学がん進展制御研究所長 向田直史